

令和五年春彼岸法話

表と裏の関係

正信寺 石川英和

令和五年三月二十一日 正信寺 春彼岸 法話

表と裏の関係

釋英和

【はじめに】

本日もご多忙のところ、春のお彼岸にお参りいただきましてありがとうございます。

今日は表と裏についてお話しさせていただきます。

【コインの表裏】

昨年はサッカーワールドカップがありました。キックオフを決めるときや同点でペナルティーキックを行うときの先攻を決めるのにコイントスというのを行います。試合開始前に、両チームのキャプテンが握手したのち、コインの裏と表、どちらかを選択した上で主審がコインを投げ、コイントスに勝った方のチームがキックオフで始めるか前半に攻めるゴール、つまりエンドを決めて試合が開始されます。日差しや風の影響を考えて、エンドを決めることが多いと聞いています。

ところが、コイントスも、近年ルールが改正になったようです。

昔は、コインを指で弾いて地面に投げるようにしていました。芝や土のグラウンドで行っていたので、コインは必ず表か裏になったのですが、最近は、人工芝のグラウンドが多くなって人工芝の間にコインが挟まって立ってしまふことがあり、審判がコインを指ではじいて両手で挟んでキャッチするようになったと聞いています。コインの表と裏も、時代の流れ

に寄り決め方が変わってくるのかと驚きました。

ご存知のように、コインには表と裏があります。表裏一体という言葉がありますが、表だけ、裏だけというコインはありません。

光と影なども、光がなければ影もできないので、表裏一体の関係にあるのではないかと思います。私の身の回りには、望ましいものと忌み嫌うものが表裏一体の関係にあるものは多いように思います。

【補陀洛渡海】

この表裏一体の関係を考えるきっかけとなったのは、昨年、私が正信寺の住職を継承したあと、井上靖の「補陀洛渡海記」という短編を読んだことにあります。

極楽は西方にある阿弥陀仏の浄土に対して、華嚴経によれば補陀洛は南方にある観音菩薩の浄土と言われています。紀伊半島の熊野地方では、海の遙か南に補陀洛があると信仰されていました。井上靖の小説の記載では「補陀落」ですが、実際の熊野にあるお寺の表記は「補陀洛」です。で、文中では補陀洛と記載します。

熊野補陀洛山寺の代々の住職には、六十一歳の十一月に渡海船という船に乗って、観音浄土をめざし生きながら海に出て往生を願う渡海上人の慣わしがありました。沖縄に流れ着いたという事例もあるといわれていますが、殆どは即身仏として往生しました。六十一歳の住職というのは、まさに私と同じ境遇なのです。

これは、井上靖の創作ではなく史実です。

昨年の大河ドラマの「鎌倉殿の十三人」の原作の下地となった吾妻鏡にも、天福元年（一二三三年）五月二十七日の条に、下河辺六郎行秀と

いう元武士が補陀洛山寺で「智定房」と号し渡海に臨んだと記されています。下河辺行秀は、源頼朝が「日本無双の弓取り」と称し、源平合戦では鎧を売って船を用意した下河辺行平の弟です。

井上靖の「補陀落渡海記」のあらすじを紹介します。主人公、金光坊は、補陀洛山寺の住職に就任します。金光坊が若い修行僧の時に何人も住職を補陀洛渡海に見送り、その先輩僧侶それぞれに個性のある立ち振る舞いや考えを尊敬していましたが、いざ自分がその年になり渡海しなければならなくなると、その境地に達していないことに気付くのです。まだ生きたいという俗世間の欲望が生まれ、船から逃げ出すのですが、周囲に追い詰められ、弟子に見つかり、また、船に乗せられて流されるというのです。

自分の意志とは別に死に向う恐怖と葛藤は、第二次世界大戦の特攻隊と似ているようにも思いますが、特攻は命じられるのに対し、補陀洛渡海は自分の信じる教えに従って自発的に捨身を行って民衆を先導する行なのです。

死にたくないと言った金光坊を見送った弟子が補陀洛山寺最後の渡海上人となった記述されて物語が終わります。

それ以後は、補陀洛山寺では、亡くなった住職を海に流すようになったそうです。

ところが、渡海は明治四十二年（一九〇九年）まで行われました。天俊上人が渡海したという記録が残っているそうです。

渡海して檀家や弟子に尊敬されて即身仏として死ぬのか、周囲から蔑まれながら生き永らえるか、表と裏の関係なのではないかと思いました。

と、同時に、私は正信寺の住職で良かった、補陀洛山寺の住職でなくてよかったと思いました。この本を読んで、私も、住職としてどのくらいの覚悟があるか、自問自答しています。と同時に、今までのサラリーマンの生きざまの中で、自分の進むべき仕事に邁進するか、上司に胡麻をすって立身出世するような仕事をするかという判断もあったなあと思いました。

【成功と失敗】

成功と失敗も表裏の関係にあるのではないのでしょうか。

お釈迦さまの弟子に周利槃特（しゅりはんどく）というお弟子がいました。生まれつき物覚えが悪く、自分の名前も覚えられなかったため、自分の名前を書いた板を首から下げて名前を聞かれたときにその板を見せて名乗るほどでした。その一方、お兄さんの摩訶槃特（まかはんどく）は優秀な人で、周利槃特より先にお釈迦さまの弟子になり、頭角を現していました。

周利槃特はお兄さんの摩訶槃特の勧めで出家しますが、三ヶ月経っても仏教の教えを一文も覚えられなかったため、さすがに見かねた摩訶槃特は周利槃特を還俗させようと思い、「おまえはあまりにも愚かでこの教えを聞いても意味がない。家に帰った方がよいだろう」と伝えました。

その言葉を聞いた周利槃特はショックのあまり、道でうずくまって泣いていると、ちょうどお釈迦さまが通りかかられました。

「なぜそんなに悲しむのか」

お釈迦さまがお尋ねになると、顔を上げた周利槃特は自分の愚かさを

告白しました。

「悲しむ必要はない。おまえは自分の愚かさを知っている。世の中には賢いと思っている愚か者が多い。愚かさを知るのは、最もさとりに近いのだ」

周利槃特はお釈迦さまの言いつけの通り掃除をしながら、「塵を払わん、垢を除かん」の言葉を必死に覚えようとしたが、「塵を払わん」を覚えると、「垢を除かん」を忘れ、「垢を除かん」を覚えると、「塵を払わん」を忘れ、こんな短い言葉でもなかなか覚えることもできませんでした。

しかし周利槃特は、それを二十年間続けました。その間、一度だけお釈迦さまから褒められたことがありました。

「そなたは何年掃除しても上達しないが、それに腐らずよく続けている。上達することも大切だが、根気と継続はもっと大事だ。そこが他の弟子に見られぬ殊勝な点だ」

彼のひたむきな精進を、お釈迦さまは評価されたのです。

やがて周利槃特は、チリやホコリは、あると思っている所ばかりにあるのではなく、「こんな所にあるものか」と思っている所に意外にあるものだと知り、そして、

「自分は自分のことを愚かだと思っていたが、自分で気づかないところに、どれだけ愚かさがあるか分かったものではない」と驚きました。

そのときついに彼に、阿羅漢のさとりが開けたのです。

後に周利槃特は十六羅漢と呼ばれる、お釈迦さまのお弟子の中でも特に優れた弟子の一人として、「義持第一の周利槃天尊者」と呼ばれるようになりました。仏説阿弥陀經の中にも、「皆是大阿羅漢 衆所知識 長老舍利弗・周利槃陀伽」というくだりがあります。

周利槃特は、仏教の教えを覚えられなかったという失敗がありますが、その失敗を自覚して自分の愚かさに気付くことによって、阿羅漢のさとりを得るといって成功を得ました。

失敗と成功はコインの表裏と同じような関係にあるのではないでしょう

【周利槃特と茗荷の関係】

蛇足になりますが、周利槃特の死後、彼の墓の周りに見慣れない草が生えてきました。

その草を何と呼ぶか考えたとき、周利槃特が自分の名前が覚えられず、名前を書いた板を背負っていたことから「名」を「荷（にな）う」ということでその草に「茗荷」と名前を付けました。

この言い伝えが今日まで残っているのです。茗荷を食べると物覚えが悪くなるというのは、この故事に由来するものですが、科学的な根拠はないようです。

更に余談ですが、周利槃特をモデルにして作られたのが赤塚不二夫さんのマンガ「天才バカボン」に出てくる「レレレのおじさん」という説があります。レレレのおじさんも周利槃特と同じように常に箒をもって掃除しています。

お釈迦さまのことを別の呼び方で「薄伽梵（ばがぼん）」と呼びますが、

ここから天才バカボンの「バカボン」というキャラクターの名前が付けられたとも言われています。

赤塚不二夫さんが仏教に詳しくあったのは事実のようで「天才バカボン」の中にバカボンのパパはお釈迦さまと同じように生まれてすぐに歩き、「天上天下唯我独尊」と言ったというエピソードがあります。



出典：https://www.koredeiinoda.net/manga/bakabon_episode4.html

しかし、赤塚不二夫さんが考えたわけではなく、天才バカボンがお釈迦様の呼び名から命名されたというのは、別の人が後から考えた説とも言われていますので、残念ながら真偽のほどは不明です。

【煩惱と覚り】

お釈迦さまは煩惱を滅して、覚りを得るために修行しました。苦行をしても覚ることができず、菩提樹の下で、村娘のスジャータからもらったミルク粥を食べて、中道が良いと覚るのでした。

菩薩の四弘誓願（しぐぜいがん）は、あらゆる菩薩が初めて発心した時に起こす四種の誓願とされます。

- ・衆生無辺誓願度（一切衆生をすべて覚りの彼岸に渡すと誓うこと）
- ・煩惱無量誓願断（一切の煩惱を断つと誓うこと）
- ・法門無尽誓願知（仏の教えをすべて学び知ると誓うこと）
- ・仏道無上誓願成（仏道において無上の覚りを成就すると誓うこと）とあります。「煩惱無量誓願断」が立てられているのは、煩惱を断ずることが仏教の基本思想であることを示しています。

ところが、人間は所詮、煩惱から逃れられぬというところに観念し、煩惱があるがままの姿として捉え、そこに悟りを見出だそうとする煩惱即菩提の考えが、次第に大乘仏教の中で大きな思想的位置を占めるようになります。

私達は、何かしらの煩惱を持って生活しています。煩惱から逃れることはできないのだと思います。

年越しには、お寺の鐘楼で除夜の鐘を百八回突きます。百八は、人が持つ煩惱の数といわれていて、鐘をついてそれを除こうとすることが除夜の鐘の起源と言われています。百八の根拠とされているものも諸説あります。

眼、耳、鼻、舌、身、意の六根×人間の感情のあり方（好＝快感、悪＝不快、平＝どちらでもない）の三×浄＝きれい、染＝きたない、の二×三世（過去・現在・未来または前世・現世・来世）をかけると百八になるという説。

そして、四苦（四×九）と八苦（八×九）を足した数が百八などです。

良い煩惱、悪い煩惱という分類は仏教では聞いたことがない、個人の説なのですが、他人が持っている物がほしいとか、上司の足を引っ張って更に自分の地位と給料を上げたいというのは、悪い煩惱だと思います。ところが、現在の学力で満足せず更に勉強しようとか、あの人のよ

うな立派な人になりたいというのは、良い煩惱の一つだと私は思います。良い煩惱は自分を成長させる原動力になるのではないかと私は思います。

唯円は、歎異抄に煩惱具足でも阿弥陀様に救われると、親鸞聖人の聞き書きで著わしました。

また、煩惱があるからこそ悟りを求めようとする心、つまり菩提心も生まれると考えられるように思います。

煩惱と覚りも、実は表と裏の関係なのだと思います。

【おわりに】

一般的なイメージとして表をポジティブかつ好ましく、裏をネガティブで忌まわしいものと感じてしまいがちです。

ところが、意識を変えることで、裏があるから表があると清濁併せて飲み込むことができるのではないかと思います。

現在、不幸な環境にあるという認識がある人も、不幸があるから幸福もあると考えると不幸にある現状を少しでも楽に捉えること、受け入れることができるのではないのでしょうか。

生死も表と裏の関係だと思えます。病気で余命を宣告された人も、死を意識して余命をどれだけ充実させるか考えることでよりよく生きることができないのではないのでしょうか。そして、全ての人も必ず死が訪れることを考えれば、誰もが一瞬たりとも無駄にせず、よりよく生きようと感じるのではないのでしょうか。

仏教の教えとして、而二不二（ににふに）という言葉があります。文

字面を見ると、二つにして二つでないという意味です。

真言密教の世界では、大日如来を中心とした曼荼羅図で「智慧」を表す金剛界と「慈悲」を表す胎藏界は別々に描かれますが、実際には一つに融合しているという思想があります。智慧を離れて慈悲の徳はなく、慈悲を離れて智慧の徳もないという意味です。

例えば、お医者様で、医学の知識や技術だけあっても病気は治せません。また、腕の良いお医者様でも、人を直したいという気持ちがなければ病気は治せませんという事です。

而二不二の考え方では、コインの表と裏も同じように、煩惱と悟りも二つであり、それでも二つではないという事になります。

本日は、ご清聴いただきありがとうございました。

浄土真宗

安養山 正信寺